平和の構築に必要なもの

鎌田昭良

戦略家リデル・ハートは、大戦略の目的は戦争に勝利することではなく平和を構築することであると述べています。米国の国務長官を歴任し、国際政治学者でもあるキッシンジャー博士の代表作『回復された世界平和』は、フランス革命とナポレオン戦争による大混乱後のヨーロッパで平和の構築がどのように行われたかを分析し、平和の構築に何が必要なのかを教えてくれるバイブルです。

ナポレオン戦争後の国際秩序は「ウィーン体制」と呼ばれ、自由主義運動などを抑圧した保守反動体制であるというのが教科書的な説明です。しかしながら、キッシンジャーは、ウィーン体制はフランス革命とナポレオン戦争によって破壊されたヨーロッパの秩序を再構築し、1914 年の第 1 次世界大戦まで続くヨーロッパの長期にわたる平和をもたらしたと肯定的に評価します。キッシンジャーは、平和は希求するだけでは達成できず、その構築には、政治指導者による秩序の形成が必要である主張します。ウィーン体制においては、オーストリアの宰相メッテルニヒとイギリスの外務大臣カースルレーを中心とする指導者が列強間の「勢力均衡」を背景にしながら正統性という概念を共有することにより、ヨーロッパに再び安定的な秩序を作りだしたと分析します。

キッシンジャーの分析の中で私が注目するのは、「正統性」という概念です。この言葉は難解ですが、一般的にはヨーロッパをフランス革命前の状況に戻すことと説明されます。キッシンジャーは、この正統性という概念を「主要大国による国際秩序の枠組みについての合意」と一般化した上で、国際社会の安定について巧みな説明をします。

「逆説的だが、当事国がみな少なからず不満をもっていることが安定の条件である。仮にいずれかの国が完全に満足するとすれば、他のすべての国々は、完全に満足しないことになり、その結果、革命的状況がもたらされる。従って安定とは、不満がないことを意味するのではなく、その不満を講和がもたらした枠組みの中で調整してゆこうとせずに、その講和自体を破壊することに救済方法を求めようとするほどの大きな不満がないということを意味している。すべての主要大国によって受け入れられている枠組みを持つ秩序は正

統性がある」

国益追求の現実主義外交（Real Politik）の提唱者と言われるキッシンジャーが、安定のためには国益追求に「自制」が求められると主張していることに私は深みを感じますが、キッシンジャーは力のみでは安定した秩序は形成できず、関係当事国に受け入れられる原則（正統性）が必要であり、力でヨーロッパをねじ伏せたナポレオンも正統性を打ち建てることができなかったため統治に失敗した、と言います。ウィーン体制においては、ヨーロッパ列強の指導者たちがフランス革命前の状況に戻すと〝合意したこと〟が「正統性」を構成し、力の均衡と相まって、秩序の安定につながりました。

問題は、正統性を受け入れず、自国が完全に満足する安全保障を求める〝革命勢力〟が存在する場合です。このような場合には枠組み内での外交は機能せず、外交にとって代わって、戦争か軍備拡張競争が起きるとキッシンジャーは説明します。革命勢力の本質は、その信念や理論を実現しようとする情熱・勇気であるとしていますので、その考えに従えば、特定のイデオロギーや宗教的信念などの実現を目指す勢力のみならず正義を主張する理想主義者も秩序にチャレンジすれば革命勢力となります。

キッシンジャーは本の中で、自己の力の「限界」を認識していない国も秩序へ挑戦する革命勢力になりうるとほのめかしています。自己の力の限界を認識することは戦いにおいても重要なことだと私は考えますが、秩序の安定の点で各国が自らの力の「限界」をわきまえていることが大事だとの示唆、前述した「自制」の主張と合わせて、強硬な意見がもてはやされがちな今の世界においては新鮮ですし、私はそこに〝成熟した知性〟を感じます。

もちろん、キッシンジャーの考えに対する批判はありますが、これだけの知性を備えた人物がアメリカ外交を担っていたこと、過去のことですが、アメリカの強さだったと私は考えます。

（この論考は、令和元年１２月５日の朝雲新聞に、「前事不忘　後事之師」（第４７回）として掲載されたものです。）